

第1回 日本漢字能力検定 試験問題

氏名

1級

解答は、現代仮名遣いによるものとする。

解答は別紙(答案用紙)に書くこと。

(一) 次の傍線部分の読みをひらがなで記せ。(30) 1〜20は音読み、21〜30は訓読みである。

(二) 次の傍線部分のカタカナを漢字で記せ。19、20は国字で答えること。(40) 2×20

(三) 次の1〜5の意味を的確に表す語を、後の□から選び、漢字で記せ。(10) 2×5

- 大地が皺曲して山岳を造る。
- 施薬院建立の懿旨が下った。
- 脳髄中に奇怪な想念が蟠結していた。
- 便嬖の臣を遠ざける。
- 岷々たる巉巖がそそり立つ。
- 日ならずして匪賊は勦殄された。
- 山野に自生する菌草の類を珍重した。
- 書状の冒頭に寒暄を叙する。
- 熒然として我独り異邦の地に存えた。
- 池に遊ぶ鳧翁を飽かず眺めていた。
- 疲弊せる億兆の民を綏撫する。
- 澹として水の如き交わりである。
- 孱顔に足を投げ出し空山に蝨を捻る。
- 官吏怠慢にして糶糶の煩を厭う。
- 衰老を養うに麩粥飲食を行う。
- 木の罌缶を以て軍を度し安邑を襲う。
- 畚土の基其の高きを成さず。
- 転た相因仍し其の本を正す莫し。
- 茜衫年旧り蓬鬢霜新たなり。
- 勳率を忘るる無く以て人倫を厚くせよ。
- 鯢の群れが海の色を変えた。
- どうやら秕ばつかし擱まれたらしい。
- 明日香の風が采女の袖を吹き返す。
- 濃密な花の香りに噎せる。
- 怕るべき異能を蔵していた。
- 如何様来者は誣い難い。
- やおら著を手を取った。
- 予乃の徳を懋んにす。
- 善行蒼穹を扞ち天福を以て之に報ゆ。
- 相は紅に藤襲の織物なり。

- 泣きジャクる子供に手を焼く。
- おめおめ敵軍のフリヨとなった。
- 殊更トガめ立てする程の事ではない。
- センタイ植物の観察会に参加した。
- アカダナに水と花が供えてある。
- 優勝を逸してハギシりする。
- ザンゴウに飛び込み掃射を避ける。
- リジに入りやすい譬え話である。
- 業を煮やして罍の蓋をコじ開けた。
- 隣国とのコジれた関係を修復する。
- 両語は同一のハンチュウに属さない。
- 赤貝と分葱のヌタを拵える。
- インヤクの間に深遠なる哲理を語る。
- 王の名をセンシヨウし国を略取する。
- 遷都の事はセンシヨウ通りに行く。
- センシヨウに不気味な髑髏旗が翻る。
- ムクゲの花が咲く時季になった。
- ムクゲの犬を飼っている。
- 紅のホ口を靡かせて先陣をきった。
- イカルの啼く夏の山里を訪れた。

- 征伐すること。うちこらしめること。
 - つまづくこと。失敗すること。
 - クジラ。大魚。また悪党の首領。
 - 酒色に溺れ荒んだ生活をする。
 - 土地の神と五穀の神。転じて国家。
- げいげい・さち・しぎやく
しゃしよく・じんぎ・たんめん
まんさん・ようちよう

(四) 次の問1と問2の四字熟語について答えよ。(30)

問1 次の四字熟語の(1〜10)に入る適切な語を後の□から選び漢字二字で記せ。(20) 2×10

- | | |
|--------|--------|
| (1) 誅求 | 麻姑(6) |
| (2) 鼯鼠 | 肉山(7) |
| (3) 手低 | 黄中(8) |
| (4) 兼道 | 環堵(9) |
| (5) 絶塵 | 竜攘(10) |

えこ・かれん・がんこう
こはく・しょうぜん・しんや
そうよう・ちよういつ・ないじゅん
ほりん

問2 次の1〜5の解説・意味にあてはまる四字熟語を後の□から選び、その傍線部分だけの読みをひらがなで記せ。(10) 2×5

- 苦しむ者を更に苦しめる。
- 長い時を無駄に過ごす。
- 老人のこと。
- 比類のない碩学をいう。
- 地方官の退任を惜しむ民情。

崎嶇坎坷・束皙竹簡・頭童齒豁
緇林杏壇・攀轅臥轍・曠日弥久
落筭下石・厭聞飢聽

1級

解答欄を間違えないよう設問番号を確認してください。

氏名

(五) 次の熟字訓・当て字の読みを記せ。

- 1 踏 躰
- 2 天 魚
- 3 蜈 蚣
- 4 抽 斗
- 5 伯 刺 西 爾
- 6 接 骨 木
- 7 五 倍 子
- 8 鴨 脚 樹
- 9 梅 花 皮
- 10 金 翅 雀

(10)

1×10

(七) 次の1～5の対義語、6～10の類義語を後の□の中から選び、漢字で記せ。

□の中の語は一度だけ使うこと。

対義語

類義語

- | | |
|-------|--------|
| 1 荒 蕪 | 6 瞳 人 |
| 2 怡 楽 | 7 佳 肴 |
| 3 慶 福 | 8 守 株 |
| 4 一 掬 | 9 濫 觴 |
| 5 家 嚴 | 10 尺 地 |

(八) 次の故事・成語・諺のカタカナの部分(20)を漢字で記せ。

- 1 百舌のハヤニエ。
- 2 ソウデン変じて滄海と成る。
- 3 センソンの仁。
- 4 二卵を以てカンジヨウの将を棄つ。
- 5 ホウロク千に槌一つ。
- 6 スウロの学。
- 7 合抱の木もゴウマツに生ず。
- 8 ジャコウは臍故命を取らるる。
- 9 臥榻の側ら他人のカンスイを容れず。
- 10 カユ相掬わず。

(20)

2×10

(六) 次の熟語の読み(音読み)と、その語義にふさわしい訓読みを(送りがなに注意して)ひらがなで記せ。

(10)

1×10

〈例〉健勝……勝れる

けんしょう
すぐ

- ア 1 覺 鍾……………2 覺 る
- イ 3 嫩 緑……………4 嫩 い
- ウ 5 抔 飲……………6 抔 う
- エ 7 縮 撰……………8 縮 べる
- オ 9 祓 禳……………10 禳 う

(九) 文章中の傍線(1～10)のカタカナを漢字に直し、波線(ア～コ)の漢字の読みをひらがなで記せ。

(30)

2×10

1×10

A 学のものたるや、音に人をして芸術の妙を致さしむるのみならず、亦其の意志をして高尚ならしめ、其の品性をし
て優美ならしむ。試みに眼を放ちて東西美術家の風采を比較せよ。本邦の美術家は跼蹐として蠢きアクセクとして安んぜ
ず、欧米の美術家はシヤクシヤクとして安んじ卓爾として立てり。蓋し彼の美術を貴ぶこと殊に甚だしくして、我の甚だ
しからざるもの、之が最大原因をなさざるは無しと雖も、亦我が美術家の学に疎なるものが因をなさざるを得ず。学な
る哉、学なる哉。其の正路に向かって進むや、黄河の崑崙より出でて滾滾蕩蕩、嶮嶮を衝き平蕪を断ち、境に随い形を賦
し、千里一灑、洋溢として東海に注ぐが如きもの、夫学の真相なる哉。以上論じ去り論じ来る所を総括して之を反言す
れば、凡そ術は必ずや学に依らざるべからざるなり。学に依らざるの術は跼蹐として局部に止まるのみ、未だ能くリクゴ
ウに雄飛することを得ざるなり。

(伊東忠太「建築哲学」より)

B 抑西郷南洲翁は筑紫の一隅に生まれ、天縱の徳量を稟け、蚤く宇内の形勢を察し、ギョウウキの政、コウシヨ儉安に
流れ外患オウ荐りに迫り、或いは欧米の属隸とならんことを憂え、皇道を興起し、万国タイジの勢を拡張せんと欲して精誠を
尽くすと雖も、時の猜忌する所となり、三たび南海の孤島に竄せらるるに至るも、尚自ら誠心を養い、王室を眷顧し、国
威を顕耀するを以て己の任とす。其の至誠の瑩徹する所、天人共に応じて終に能く維新の鴻業を造し、天下皆国家の柱石
と恃む。而して昊天吊せず、日月と光を争うの明德マイマイとして、世に明らかならざるに至る。吾儕声を吞みてコクす
ること久し。今茲に明天子、翁が元勳を追懐し贈位の典有り。吾儕之を聞きて雀躍して曰く、是翁の盛徳を明揚するの秋
也と。偶翁に従游の人、其の肖像を鞞轂の下に建て、功業を永世に顕照せんことを謀るに会す。吾儕起ちて之を賛成す。
是を以て猥りに自ら量らず、嘗て親承する所の遺訓と其の盛徳とを録して、并せて主旨書と共に同好有志の諸君に啓する
は翁の盛徳大業並びに世に顕照せんことを欲する也。然りと雖も翁は乃ち一世の泰斗、其の徳声の及ぶ所極めて広し。吾
儕の承聞する所、固より大倉のイチゾクのみ。請う、四方同好の君子異聞あらばスイキヨウを吝しむなく、幸いに此の条
項を増補して以て此の拳を賛成せられんことを。

(「南洲翁遺訓」序文より)